

## 公開シンポジウム「遺伝子組換え作物とその利用に向けて」

主催者挨拶

日本学術会議会長 金澤一郎

本日は、遺伝子組み換えに関する公開シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。この遺伝子組換え作物の問題に関しては、日本学術会議はちょうどこの7月に「我が国における遺伝子組換え植物研究とその実用化に関する現状と問題点」と題する提言を発出したところです。

その提言の中に大変大事な一節がございますので、それをまずご披露いたします。『遺伝子組換えの技術は、自然界に既に存在する生物現象を、人類が一部の遺伝子を加工して、より効率を上げたもので、いまでは世界的標準技術となっている』という部分です。要するに、遺伝子組換えという現象は自然界ですでに沢山あるということです。遺伝子組換えがあたかも「危険の巣窟」のように誤解して思っておられる方々にはよくご理解いただく必要があると思います。

誤解といえば、遺伝子組換え作物を食べると、「異常な遺伝子が吸収されて、そのまま自分の遺伝子になってしまう」と考える人もいるということを知って愕然としたことがあります。こうしたとんでもない誤解が実は小・中学校の先生にもあるらしく、さすがに理科の先生で遺伝子組換えを危険と考える人は30%程度しかいないのに対して、国語や社会の先生は60%程度が危険と考えている、という誠に困った、そして驚くべき現実があるようです。

ご存じの通り、遺伝子組換え作物は、十数年前にアメリカで承認され、モンサント社が10年に渡ってトウモロコシやダイズについて独占的に栽培してきました。その結果、特に問題は起きなかったという実に貴重な情報を我々に提供してくれました。アメリカで初めてこれを承認した時の委員会の委員長に話を聞いたことがあります。大変誇らしげに「承認は一種の決断であった」ことを述べていたのが印象的でした。我々はそこから多くのものを学ぶ必要があると思います。

最後に、我が日本学術会議の役割の一つが、「科学リテラシーの向上」であることを考えますと、この公開シンポジウムは多くの国民の方々に「遺伝子組換え作物に対する正確な知識を持って頂くためのよい機会」であると思います。そして、国民の皆さんが、今後とはとんでもない誤解に基づいて賛成したり、反対したりすることがないことを心からお祈りしながら、これを私のご挨拶に代えたいと思います。